

対応困難な事例にしないための 対象理解の構造

—在宅療養患者への地域包括支援センター 保健師の支援過程の分析を通して—

猪狩崇（理論看護学）

【キーワードズ】 看護，生活過程，追体験，対象理解，
対応困難

本研究の目的は、地域包括支援センターの保健師として関わった対応困難事例との支援過程を分析して、なぜ対応困難になるのか、対象理解をどのように深めていけばよいかについて、明らかにすることである。

研究方法は、地域で対応困難とされた1事例および、対応困難化の可能性がある3事例、計4事例の看護過程記録を研究資料とし、「対象の事実」「保健師の認識」「保健師の言動・状況」の欄を持つ研究素材フォーマットを作成し研究資料からキーセンテンスを該当欄に記入し研究素材とする。分析は、研究素材フォーマットに「保健師の認識特徴」、「そのときうかんだ像」、「全体像を描く際の位置づけ」の分析欄を追加し、保健師の認識特徴が自分の位置にいるか他者の位置に移っているかを吟味して「保健師の認識特徴」欄に〈自分の位置〉または〈他者の位置〉を記入し、その時の認識を思い出して「そのときうかんだ像」欄に記入、それらの認識の全体像を描く際の位置づけをし該当欄に記入する。次いで場面ごとに「看護過程の現象」、「その論理」、「保健師の認識特徴」を抽出し、各事例の対象理解の構造を明らかにする。4事例の対象理解の構造を比較検討し、共通構造を抽出し研究結果とする。

研究結果：研究素材は4事例、計13場面となった。各事例ごとの対象理解の構造は、A【その人の強い個性を感じた場合には、長い生活過程のすべてを背負った存在としてとらえ、自己の体験像とも重ねながら相手の立場での追体験を繰り返すことで対象の頭の中が見えるようになる】、B【妄想性の障害の原因をつきとめたい場合、障害をもつにいたったそ

の人の人生をしっかりと押さえ、症状があらわれざるを得ない状況での追体験を繰り返すことで、自己の体験像も材料として相手の位置からみた社会との関係性やその時の感情が感じ取れるようになる】、C【老年期の疾患の予防が必要な場合、その人の一連の生活過程を過去から現在まで描けるようになることで、自己の体験像とも重ねてその生活をつくりだしている相手の立場をわが身に迫る実感とともに追体験できるようになる】、D【認知症の人とかかわる場合、健康時から発症、現在に至るまでの生活過程をふまえて健康の段階を把握しつつ、対象がどのような世界をみているか自己の体験像も手掛かりにしながら追体験することで、相手の位置に移行でき、気持ちのありようや変化を感じ取れるようになる】であった。

これらの対象理解の構造を比較検討し抽出された共通構造は【対象の全体像を描いて相手の立場での追体験を繰り返しかかわる中で、対象が健康時から、発症時、現在までの生活過程を背負った存在として見えた時、自己の類似の実体験像とも重ね合わせ相手の認識と近似的な像を感情として描くことで、相手の位置に移行でき、相手の気持ちを感じ取って三重の関心を注げるようになる】であった。

結論：上記の対象理解の共通構造に加え、それを実践に生かすための条件として以下の2点が見いだされた。

1. 常に実践方法論に沿って三重の関心をそそぐかわりを続けることで相手からのSOSにいち早く気付けるセンスを養いつつ、相手の立場での追体験が相手の位置に移行したものとなるように、自己の実体験像も重ねて相手の認識に近似的な像を感情として描く訓練を積む。
2. 地域で支援活動を行う看護職は、対象と直接かわられない時間の隔たりや生活空間の広がりについて、生活過程の見えない部分を得られた事実から科学的理論に導かれた対象理解の共通構造に沿って描きだし、より早く相手の位置への移行ができるよう、自己の実践を振り返りながら訓練する。